

書評

モリス・H・ドップ

『資本主義の発展にかんする研究』

Studies in the development of capitalism, by Maurice Dobb, lecturer in Economics in the University of Cambridge, London, Routledge and Sons Ltd., 1946. second and third impression 1947. X+396 pp.

水田 洋

1

著者ドップが、ケンブリッジ學派にそだってそれをこえた、すぐれたマルクシストであることは、いまさらいうまでもないし、また、その經濟理論上の功績を評價するには、べつの場所と人が必要であろう。だが、本書の紹介にはいるまえに、わたくしがしりえたかぎりのドップの著書をあげて、かれの學問のりんかくをしめしておきたい。

Capitalist enterprise and social progress, Lond. 1925.
Russian economic development since the revolution,

assisted by H. C. Stevens, Lond. 1928. New ed. Soviet economic development since 1917. 1949. (舊版の紹介、日下藤吾、ネップの研究。新版の紹介、中島登、轉換期の經濟、經濟評論、昭和二十四年一〇月。)

Wages, Cambr. 1928. New ed. rew. and reset., 1938.

Soviet Russia and the world, Lond. 1932.

An introduction to economics, Lond. 1932.

Political economy and capitalism, Lond. 1937.

U. S. S. R.: Her life and her people, Lond. (出版年不明)

A complete catalogue of books, 1949, published by the University of London Press Ltd. (未刊)

これらのうち、主著と云ふべきものは、まず「經濟學と資本主義」、それについて、「ソヴェート經濟の發展」「資本家的企業と社會的進歩」および、ここに紹介しようとする「資本主義の發展にかんする研究」であらう。本書については、すでに日下藤吾氏による紹介(英國資本主義の發展と獨占、季刊理論一〇・一一號)があり、さらに近刊を預告されている同氏の「唯物史觀歐洲經濟史」は、本書のほんやく的紹介であるらしい。

本書の内容は、フラップに要約されたところによれば、「經濟形態としての農奴制の没落の諸理由の分析にはじまり、……一三、一四、一五世紀の都市共同體の興隆におけるブルジョアジの端緒、一六、一七世紀の産業投資の成長、資本蓄積とプロレタリアート形成との結合した過程」をとりあつかう。これら

の章において、資本主義の興隆の決定的な要具としての、さまざまな形態の獨占に、特別の注意がはらわれ、貿易および商人資本の成長がえんじたとしば考えられる役割を否定することに、若干の注意がむけられている。本書全體をつうじてくりかえされるテーマは、經濟政策および政治形態さえも規定する根本的要因としての、労働市場の状態の、強調である。」そしてさらに著者は、經濟事象の發展に對應する經濟思想（主としてマーカンティリズムと古典學派）にもふれながら、歴史的分析をすすめて、産業革命から國家獨占資本主義におよんでいく。すなわち、本書の章別構成はつぎのとおりである。

Preface

Ch. 1, Capitalism

Ch. 2, The decline of feudalism and the growth of towns

towns

Ch. 3, The beginnings of the bourgeoisie

Ch. 4, The rise of industrial capital

Ch. 5, Capital accumulation and Mercantilism

Ch. 6, Growth of the proletariat

Ch. 7, The Industrial Revolution and the nineteenth century

century

Ch. 8, The period between the two wars and its sequel

quel

Index.

書評

以上のかんたんな説明によっても、本書の對象（時期）と視角（問題）が、大塚史學のそれにきわめて接近していることが豫想されるであらう。わたくしの紹介も、この部分を中心におこなわれるのであつて、おわりの二章には、紙數のかんけいからほとんど言及できないことを、あらかじめおことわりしておきたい。

2

「著者は、資本主義の歴史 a history of capitalism をかいたという幻想をもっていない」と、序文にのべているとおり、本書は、「他の人人によつてすでにあつめられ整理された材料にもとずいて、歴史的發展にかんする一般化をくだせるしごと」であり、原史料についての研究ではない。典據として使用されているのは、マルクス、リプスン、アンウィンがもつともおおく、つぎにビレンヌ、カニンガム、ジョンソン、クラッパム、マントウ、アシュレイなどである。このような二次的資料によつたことは、まず、本書のけっかんのひとつとして指摘されるであらう。原史料の正確な把握は、歴史研究の根本原則であり、史的唯物論もまたそれによつてささえられぬかぎり、ひとつの「見解」にすぎない。

けれども、本書について、こういうけっかんを指摘する資格を、とくにこの國においてだれがもつであらうか。たとえば、大塚史學がイギリスについて列きよする「史實」は、げんみつ

ないみでそうよびうるであらうか。著者はすでに、本書のようなころみによって自分が「經濟學者」としては、自己の本来の領域からさまよいでた不信心者とみえ、歴史家にとっては、さしでがましい素人とみえるだろう」といっている。「それにもかかわらず、かれは、經濟的分析は、歴史的發展の研究とむすびついたときにのみ、いみをもち實をむすびうるものであり、今日の問題に關心をもつ經濟學者は、歴史的数据にたずねるべき若干の疑問をもつものだと、かたい信念によつてはげまされてきた。かれは、……資本主義をその起源と成長において研究することがどのような現實主義的な經濟學體系にとつても不可缺のきそであるとの、確信によつてささえられてきた。」

理論家は歴史を、かれの理論上の假定の證明手段としかみないであらうし、また歴史家は、歴史における一般のカテゴリーを拒否するであらう。そのけつか、ゾンバルトが指摘したように、ジード、マーシャル、セリグマン、カッセルは、資本主義ということばをつかつていないし、マーカンテイルズムの研究家ヘクシャーも、近代資本主義の概念をみとめない。オーストリア學派、ゾンバルト、ビュヒャー、ピレンヌなどの資本主義概念は、それぞれがうてはいるが、すべて同様に「特定の歴史的體制としての資本主義」の否定に到達する。ゾンバルトやウェーバーが、資本主義を精神として理解したのは、たしかに、資本主義を總體性においてとらえようとするころみではあったが、しかし、もしこの精神自體が歴史的產物であるならば、

それを歴史の舞臺に登場させたものはなにかが問題とならざるをえない。

このように、「もし資本主義がひとつの歴史的全體として存在しないならば、體制の變革をもとめる現存經濟秩序の批判者は、風車にはむかうものであり」、資本主義ということばは政治的キャッチワードにすぎぬとさえ、いわれるのである。しかし、「あたえられたある時期における經濟體制のおおきな諸運動を理解するには、その體制特有の諸性質の方が、他の諸體制と共通な諸性質よりも重要である。」そしてさいきんの經濟史的研究は、カニンガム、トニー、リプスンのそれのごとく、資本主義のマルクスの定義にちかずき、あるいは、すくなくともそれを歴史的體制としてみとめるようになった。マルクスは資本主義を、「特定の生産様式」すなわち「勞働力がそれ自體として商品となる體制」として規定したのである。資本主義をこいう歴史的全體として把握する「歴史科學としての經濟學」は、一方では歴史的ニヒリズムに對立し、他方ではリアリズムを性急に一般性のぎせいにしたり、經濟理論を歴史學や社會學から分離したりする近代經濟學の態度を拒否する。

3

したがって、資本主義は、「生産者の資本家への直接的從屬といういみでの生産様式の變化がおこったときに」はじまる。これを典型としてのイギリス資本主義についてみるならば、一六

世紀後半から一七世紀はじめにあたる。「このとき、資本がかなりの規模において生産に滲透しはじめた。それは、資本家と雇傭賃銀取得者とのあいだの「おう成熟したかんけい」という形態において、または、いわゆる間屋制度による、自宅ではたらく家内手工業職人の資本家への従属という、未発展の形態において、滲透したのである。」そして、一七世紀における諸特許會社間の抗争および議會の反獨占闘争と、産業革命による生産者の生産手段からの決定的分離とが、資本主義發達史上の二大劃期をなす。もちろん、封建制は、一五世紀の「領主經濟の危機」がしめすようにすでに解體しはじめてはいるが、その解體は「舊生産様式の胎内における新生産様式の成長と、みっせつにむすびついているものではなく、そのころからエドワード三世およびイリザベスまでは過渡期とみなすべきである。この期間に商業ブルジョアジーは成長したけれども、それはむしろ貴族の仲間であり、生産様式を變革しないで、時と處の價格差によって利潤を取得するにすぎないし、また、都市の手工業や農村の富裕なまたはやや富裕なフリー・ホルダーの興隆のなかには、まだあたらしい生産様式の萌芽があるにとどまる。」

ところで、じつは、資本主義の歴史的な概念規定が問題であったとおなじく、封建制概念にもすくなくならぬ混亂がある。その本質は、制度史家にとっては「土地領有が政治權力のみなものであること」、法律家にとっては「土地保有によって決定される身分」、經濟史家にとっては、「人格にたいする權利の行

使による、土地の耕作」である。ボクロフスキイでさえ、封建制とは自然經濟のことだという、非マルクスのな、歴史學派的見解をもっていた。しかし、生産様式としての封建制は、これらのいずれでもなく、農奴制のことであり、「生産者にたいして、力により、かれの意志にかかわりなく、領主のある經濟的要求をみたすために、課せられる諸負擔」のことである。だから、農耕が直領經營にしろと封地保有にしろと、政治が集權制にしろと分權制にしろと、また（ボクロフスキイの見解とは反對に）貨幣經濟の自然經濟にたいする比重がかなり増大しようと（地代が金納化されるばあいでさえ）、それだけでは封建制の本質にはかわりがないのである。

貨幣經濟（一〇〇年ごろからの商業の復活）がかならずしも封建制を解體させるものではなく、逆に強化するばあいもあることは、イングランドについてボスタン、コスミンスキイによって論證されたし、全ヨーロッパについてみとめられる。マルクスがいうように「商業は、當面の諸生産をしきにたいし、いたるところで、おおかれすくなかれ分解的な作用をおよぼす。だが、商業がどの程度まで舊生産様式の分解を生ぜしめるかは、まず第一にその生産様式の堅固さと内部的編制とに依存する。」この點を封建制解體期についてみると、つぎのごとくである。支配階級の收入にたいする要求の増大と生産體制としての封建制の非能率性が結合して、生産者へのたえがたい抑壓となり、農民の一揆と逃亡が生じ、さらに、一三〇〇年ごろ

から西ヨーロッパの人口は激減しはじめる。すなわち、封建的搾取による労働強化が限界にたつて、「封建経済の危機」が生ずるが、領主の側のこれへの対応は、あるところでは農奴制の強化（封建的反動）となり、他のところでは貨幣地代または雇傭労働への推轉となる。

それでは、この前進と逆轉との岐路はどこにあるかというところ、まず政治的には、農民の反抗のつよさ、地主領主の政治的軍事的強力、王権の作用範囲であつて、フランスでは絶対王政の勃興が封建的反動を制限したし、イングランドでは、王の法廷と司法官が、領主をおさえて農民をたすけた（コスミンスキイによれば、コモン・ロウは逆に作用する）。しかし、モスコウ大公國の政治的集権は農奴制強化をとめない、フランス絶対王政は、反動を制限したけれども、逆に歴史を前進させることはできなかったのだから、これらの政治的諸條件は、事態をかんぜんに説明するものではない。そこで、経済的條件が問題になるが、たとえばボヘミヤでは穀物輸出が勞役制の強化をつみ、イングランドとネーデルランドではそれが反對の結果をうんだのをみると、決定的契機はこれではない。決定的契機は、労働市場の状態である。

前述のように、労働市場の状態と政策とのかんけいは、ドッブの本書における重要なテーマであつて、かれはこのテーマについて、「さらにすすんだ研究のための一假説としてであるにせよ、一般的敘述をおこなう」とのべている、そして、封建制

解體期についてこの點のかなりくわしい説明を展開しているのだが、それを要約すると、労働の生産力や社會的條件（農民層の分解）をもふくめて、労働の量と價格の、土地の量にたいする比率が、決定的契機だということになるであらう。このばあい、労働の量や價格が抽象的にとらえられてはならないとおなじく、土地の量も、領地のおおきさ（および領主のつよさ）をふくめて考えられなければならない。一四世紀イングランド、一五世紀末オスト・エルベ、一六世紀から一九世紀末までのロシアにおける農奴制の歴史は、ここから説明されるであらう。

商業の復活、市場の擴大、貨幣經濟の滲透は、このような徑路で、領主經濟の變化をとおして、農奴制に作用するが、それよりもむしろ、農民層の分解をとおして作用する、他方では都市の興隆をつうじて解體作用をおこなう。「土地の種類や位置における不平等と、偶然的運不運のちがいが、自然に農村自體の分化をひきおこす」と、農村の貧困は、わずかの差におおくの力をあたえ、「つねに村の高利貸や小やとい主をそだてる最良の土壌」となる。また、都市は、とくに小領地において強力な解體作用をもつ。しかし、この時代のおおくの都市はまだ領主に從屬して、獨立の力となっていないかった。

4

封建制末期における都市の成立ないし復活が、どんな理由によるにせよ、そこにはすでに自由民と非自由民、もとの都市

民と新來者との權利のちがいがあつたし、まもなく都市のなかに特權階級が形成されて、かれらは生産からはなれて卸賣に専念しはじめる。しかし、一四、五世紀の初期ブルジョアジーの富は、農奴や工業プロレタリアートの餘剩労働からくるのではなく、「農民の耕作者か都市の職人」の生産物中からのわけまえであつて、その部分は、ほんらい、生産者自身か封建貴族の手にはい入るはずだつたのに、都市商人の政治的強力と經濟的特權（獨占）によつて、うばわれたのであつた（ドップはすでにこのばあいの政治的強力の活動を「原始蓄積」とよんでいる）。これらの商人は、都市の支配權をにぎり、原則として市場統制によつて特權的地位を享受する。けれどもかれらは、みずから閉鎖的特權團體でありながら、對内的統制が職人の利益になるばあいにはその統制をゆるめ、對外的統制が自己の市場をせばめると、都市相互の互惠通商協定によつて統制を緩和する。この段階にたつと卸賣および輸出商人の努力は、むしろ都市の獨占レジームの弱体化、すくなくとも職人ギルドの解體にむけられる。こうしてハンザ商業資本はフランドルにおいて、フッガーはウルム周邊において、農村工業を助長したのである。

もちろん、商業資本の特權にたいする職人ギルドの反けきもおこなわれる。その結果は、後者の上層が特權組合の地位を購入して舊來の職業をすてる（ロンドン・リヴァリ・カンパニ）か、職人ギルド自體が貿易團體の資格を獲得する（一五三〇年のロンドンのギルド合同）かであつた。だから、この段階では

商業ギルドも職人ギルドも、依然として排地的特權團體であり、その地位を維持しようとするが、一六世紀後半になると、イングランドでは産業資本への推轉が進行中だといわれる。それでは、この産業資本はどこからあらわれるか。ドップによれば、獨占商人と手工業の小親方との双方からである。すなわち、一五世紀の舊獨占商人と一六、七世紀の商人製造業者、商人やとい主とのあいだ、および、若干の財産あるヨーマン・フーマーや手工業の小親方となりあがりの資本家的やとい主とのあいだには、いずれもはっきりした區別があるのではなく、量的成長がある點にたつと質的變化が生ずるのであり、同時に、「マルクスのいうふたつの徑路は、それらの全過程において別個のものではなく、しばしば距離がなくなり交叉する。」

三章後半から四章にかけて展開される、産業資本成立過程の説明は、イングランドおよび大陸のギルドについての豊富な引例にもかかわらず（むしろ、それゆえに）、かならずしも明快ではない。たとえば、著者はしばしば商業資本を舊新二種にわけているが、それは、都市はえぬきないし外國の商業資本と新興貿易資本であるのか、ステープラーにたいする非特權貿易資本（大塚史學の國民的商人）であるのか、對外貿易資本にたいする國內商業資本であるのか、あきらかではないのである。おそらく、この過程における諸對立の錯綜と變轉は、とうてい安易な類型化をゆるさないであらう。たとえば、ステープル制への反對において、牧羊業者はその全廢を、大都市はブリュージュ

ユの單一羊毛ステープルのかわりにイングランドの小數大都市のステープル化を、小都市は外國商人がその都市にきて貿易を伸張することを、それぞれ意圖したのだし、また、フェルト製造業の内部でさえ、一六世紀後半には富裕な業者が金力にものをいわせて優良原料を買占めることが非難され、ジェイムズ一世時代には中小業者だけのインコーポレイトを要求したのであるが、コモンウェルス時代についてインコーポレイトしたときには、さらにかねらのうちの比較的富裕な層が先頭にたつていて、新組合は「かれらのまずしいメンバーをまったく維持しないで、上層を援助することだけを意圖する」と非難された。これは、アンウィンの適切な表現をかりるならば、「ある種の資本家にたいして小親方を防えいするために設立された組織が、かれを他の資本家に從屬させる道具となつた経路」であつた。大陸の例をとると、フランドルの諸都市では商人製造業者の政權把握が一三世紀に實現し、職人ギルドを外國市場から遮斷して支配する。この都市商業貴族は、諸都市間の互惠條約階級的組織によつて、個別都市の（職人）ギルド的統制をはかいるが、同時に封建貴族と妥協する。この政權にたいする職人ギルドの反抗は、ときには教會や一部封建貴族の援助のもとにおこなわれ、一四世紀には、都市貴族およびブルゴーニュのフリップの連合と、職人ギルドおよびフランドル伯の連合との、全國的規模における戦争となり、後者の勝利は、都市的的地方主義の復活と農村工業の禁止をうむ。しかるにやがて、フイ

リップの指導下に「大資本家と諸公および貴族階級との同盟」が、農民の支持をえて反げきを開始し、リエージュなどの「英雄的」抵抗もみなしく、都市の自律は集權政治に屈服する。こうして「資本主義的生産のすくなくとも部分的成長を支持する、ブルジョア都市貴族の支配のために、舞臺はきよめられた。もつとも、ギルドと都市地方主義の屈服は、商業資本と封建勢力の殘渣との同盟を代償として、えられたものではあつたが」。この代償は、オスト・エルベではもつとも高價であり、そこでは都市貴族と封建貴族の連合が職人ギルドをかんげんに破かいしてしまふ。しかも、その中心は農村工業を促進する資本家ではなくて、農産物を確保しようとする貴族であつた。

イングラントにおける、商人ギルドと職人ギルドの闘争は、主觀的にはそれぞれ自己の特權の維持ないし獲得をめざしているながら、客觀的には相互に解體的作用をあたえた。王權もまたここでは、貿易獨占については大商人を、都市地方主義については都市を支持することによつて、相互解體を促進した。このようなふくざつた抗争のなかから、都市や農村の生産者の階級分化による、生産者自體の資本家への轉化があらわれてくる。しかも、この轉化の徑路は、前述のように、二重のいみで類型化を拒否する。すなわち、特權をもとめる生産者ギルドの小親方と本來の産業資本家とのあいだ、およびさらにそれと商業資本の生産支配とのあいだに、明白な線をひくことはできない。「あきらかに、商人的および金融的資本の成熟した發展は、

そのもとにおいて資本主義生産が發展することを保證するものではないが、しかし、「眞に革命的な徑路」も、單獨で發生するのではなく、いまいったふくざつな對抗かんけいのなかでのみ、成立しうるのである。

この對立は、一七世紀前半の有名な反獨占闘争をへてピュアリタン革命になだれこむが、ここでもさまざまな利害かんけいが錯綜していることをわすれてはならない。たとえば、ロンドンの貿易組合は、極右ではあれ議會を支持したが、リーズでは上層商人は王黨であつた。そして、そのリーズとニューカスルとハルの商人が、コモンウェルス議會にロンドン商人の貿易獨占を非難する請願を提出しているし、リーズのあるヨークシャーではマニユファクチュア地帯(ウェスト・ライディング)は議會派、農業地帯は王黨であつた。「革命の眞の推進力たるクロムウェルの軍隊と獨立派は、その主力を地方マニユファクチュアを中心と、周知のように、スクアアの一部、中小ヨーマン・ファーマーからえたが、かれらは東部と東南部において支配的であつた。」

それらの諸要素は、革命の途上において分裂はじめ、極右の長老派から極左の水平派やデイガーズにいたる諸分派が出現するが、結局、復辟による舊制度との妥協におわる。この妥協の原因は、ドップによれば、貨幣階級の土地投資の廣汎な進行であり、新地主と小作人との利害の相違が、革命を、封建的土地保有の廢止の線で停止させたのであつた。長老派(とくにロ

ンドンの指導的商人)は、王黨の領主や僧侶の土地の「組織的」賣却と、インクロウジャー制限に反對した(フランス革命における土地問題を想起せよ)。とはいへ革命は、なんの効果もうまなかつたのではない。王權の致命的削減、とくに財政・軍事における議會の優越、獨占會社の沒落とジョイント・ストック・カンパニの勃興——これらの成果は「つぎの半世紀に産業資本の成長をいちじるしく強化するに十分」であつた。

5

わたくしはまえに、ドップが原始蓄積の始點を一四、五世紀においていることを指摘した。原始蓄積の中心的過程は、「ブルジョアジーが、特定種類の財産^{プロパティ}を、それがとくに低廉なときに獲得して、この財産を、その後のある時期に、その市場價值が相對的にたかくなつたときに、勞働力や産業施設と交換に實現する」ことであり、「この二重の交換行爲によつて、ブルジョアジーは、社會の富全體のうちの、よりおおきな部分を獲得する。」しかし、「一階級全體の人人が、第一段階では購入しようとし、第二段階では賣却しようとしているのに、當該財産の價值をふたつの時期のあいだに高めるには、十分に強力なある事情が介入しなければならない。」この強力な事情というのは「熟慮された國家の政策」であり「社會の舊秩序の解體」である。前者はたとえば修道院解散、王黨領の賣却、インクロウジャー、外國貿易における暴力であり、後者はたとえば、封建

の大土地所有者および一部小土地所有者の窮乏であり、同時に、それらの過程はプロレタリアートの創出でもある。

そして、マーカンティリズムとは、「本質的には原始蓄積時代の經濟政策であつた。」それは、「貿易による、國家に統制された搾取の組織であり、資本家的産業の青春期において、きわめて重要な役わりをえんじた」のである。そうすると、マーカンティリズムの起點も、原始蓄積のそれとおなじく、一四、五世紀におくことができるが、このころのマーカンティリズムは、貴金屬のみならず一般に輸出を禁止し、若干の商品の輸入を獎勵して、國內における豊富と低廉を目標とした。やがてマニユファクチュアが成長してきても、はじめのうちは、製品の國外市場よりも原料の廉價の方が重視された。少數の特權輸出商にとっては、低廉な原料による國內製品の輸出を、一般には禁止することこそ、獨占利潤のきそとなるのであつた。

外國貿易の巨大利潤は、國內資本を吸収する點で、産業投資をある程度まで阻止したし（とくにオランダ）それがテューダー期の新ブルジョア貴族層の「反動化の理由であつたが、しかし外國貿易と國內産業との對立は、想像されたほど深刻ではなかつた。なぜなら、外國貿易は主として自己金融的であり、獨占的であるから、國內資本が追加的にそこに投下される必要もなく餘地もなかつたのである。むしろ、逆に、テューダー期の外國貿易のはんえいは、國內産業への資本の流入と海外市場の創出とによって、「國內マニユファクチュアの収益性の槓杆と

して、ある程度まで作用した。」それにもかかわらず「産業投資のイニシヤティヴはそこ（外國貿易）からきたのではなく」、ささやかな地方的中産市民のものであつた。

一七世紀になると、「貿易業階級から區別された強力なマニファクチュア階級が出現」したが、かかる中産市民のはんえいも、まだ十分な國內市場を形成せず、一般大衆の生活水準は、資本蓄積のためにきわめて低くなければならなかつたから、結局、國內産業もこの時期には外國市場に依存せざるをえなかつた。しかるに、このとき、冒險商人もイリザベス期貿易組合も、すでに閉鎖的色彩をつよめつつあつたので、とうぜん、國內産業と獨占貿易資本とのはげしいたたかいが開始される。

このように、輸出の重要視はマニユファクチュアの發展とともにつよくなり、マーカンティリズムの典型的形態は、國內經濟政策として賃銀ひきさげ（大衆貧困化）、對外經濟政策として、植民地原料の低廉な供給と本國製品價格のひきあげ（掠奪と獨占）、というかたちをとるのである。したがって、ドップは、マーカンティリズムは「商業資本よりも産業資本の代辯者」であるとし、そして、輸出を重視する段階のマーカンティリズム、すなわち資本家的マニユファクチュアの發生後のそれを、後期マーカンティリズムとよんでいる。（前期マーカンティリズムの名のもとには、輸出の一般的禁止と獨占的制限とを、ともにふくませているようである）

しかし、後期に獨占的性格がないわけではない。いまのべた

ところからもあきらかなとおり、植民地貿易も、本國への植民地の從屬を楨杆としておこなわれるのだから、強力による獨占と掠奪の組織にほかならない。したがって、獨占は、形態こそさまざまであるが、資本主義自體にその根據をもっているといええるであろう。ドップにとって、獨占が本書の主要テーマのひとつであった理由も、ここにあるのだとおもわれる。かれによれば「資本のあたらしい蓄積の餘地を、つねに擴大し發見するには、産業は、市場の不斷の擴大を必要とする。しかも、すでに投資された資本の収益性を保持したかめるためには、しばしば獨占的統制の手段がとられる。そのけっかは、市場を梗そくせしめ、あたらしい擴大の可能性をおさえる。利潤がえられるための條件たる大衆の生活水準低下そのものが、生産の目的たる市場を狹隘にする。」ここに、舊ブルジョアジーの反動化の理由がもとめられるべきであり、一七世紀における獨占商業資本と新興産業階級のたたかい、一九世紀はじめにおける、ウィング貴族政治と全マーカンティリズムにたいする工場資本家の挑戦は、まさにこの矛盾の表現にほかならない。

後期マーカンティリストは、舊商業資本の獨占（輸出量の制限と價格のつりあげ）にたいして、輸出の増大を主張したが、「だれも他人の損失においてでなければ利益をえない」という根本思想にはかわりがなかった。したがって、政治的強力による國外需要の確保が「舊植民制度」の形態をとるのであり、そうして、マーカンティリストにとって、需給状態は「制度的產物」

であつた。しかし、一七世紀のおわりに、「國內マニユファクチュア製品にたいする輸出需要の量」が問題の中心となつてきたことは、それまでの「取引條件」の重視から、あきらかに區別されなければならない。すなわち、マーカンティリズムは、ここにおいて、輸出増加→國內産業の勞働雇傭の増加→餘剩價值造出者としての勞働者の増加」という理論構造をもつ。投資はんいの擴大についてのこの理論が成立すると、それにつづいて、既存投資の強化すなわち技術改良による勞働生産性の増加が主張される。そして、經濟の理論においても實踐においても、「勞働力」への關心がたかまつてくる。これが古典學派と産業革命の課題なのであつた。そしてまた、ここにいたつて原始蓄積の反面であるプロレタリアートの創出がそのいみを全面的に表現する。

いうまでもなく、低廉な勞働力は、人口の自然的増加の結果ではない。テューダー期の失業の絶頂において、總人口は一四世紀なかばのそれをこえなかつた。浮浪者ないし半プロレタリアートをつくりだすのは、封建家臣團の解體、修道院解散、インクロージャヤ、耕作方法の變化、都市ギルドの閉鎖性強化であるが、しかも、全體として一六、七世紀は、賃勞働の量と流動性が不足して、法的統制が必要であつた。そして、プロレタリアート創出過程は一八、九世紀の第二インクロージャヤによつて完了する。しかし、大陸についてみると、かならずしもイギリスの古典的徑路だけがとられたのではない。フランス

でインクロージャリーのこなわれたのは、ピカルディ、アルトワ、イル・ド・フランスなどにすぎず、おおくは農民的土地所有が支配的であった。西ドイツも後者にちかく、シュレスヴィヒ・ホルシュタインやデンマークには、一八世紀にイギリス型があらわれたが、東ドイツ、ロシアのバルト諸州とその他の地方にもまた、それぞれ特質がある。

上からの政策による農地の収奪集中というイギリスの古典的徑路だけが、プロレタリアートをつくりだすのではない。ほとんどすべての小生産者社會には、經濟的分化への傾向が内在していて、「その傾向は、不平等を阻止しうる特殊な制度が一般化していないかぎり存在する。その分化の主要因は、ときがたつにつれて土地保有の量と質に生ずるちがいであり、耕作具や役畜のちがいである。そして、終局的収奪者は債務である。」このことは、イングランドやザクセンの鑛業において、またロシアの農村において（レーニン）、例證される。

わたくしは、以上において、ドップの見解を完全に理解したとも紹介したとおもつていないけれども、「二重の徑路」の統一的はあくのこころみを、たかく評價したい。前述のように、前期および後期マーカントリズムの、それぞれの獨占化、反動化が、資本主義の基本矛盾のあらわれであるとするならば、商業資本をたんに封建的反動ないし前期的獨占として固定化することなく、資本主義的發展の必然性として、いいかえれば、十分な歴史的いみにおいて、理解することができるであらう。

う。「商業資本および高利貸資本はつねに歴史的には産業資本の成立に先行し、そして論理的にはこの成立の不可欠の條件たるものである」（レーニン）ということばのいみを、ドップにおいてこのように解釋してはならないであらうか。

商業資本と産業資本の對抗は、いうまでもなく大塚史學の課題であつたが、おなじ問題をドップは、たんなる對抗としてではなく、同時に統一としてとらえているということができよう。それだけではなく、ドップが資本主義を「労働力の商品化」と規定し、大塚教授が「生産過程からの利潤の抽出」と規定するとき、前者は賃労働者に後者は産業資本家に、力點をおいているとみてはならないであらうか。都市ギルドのなかで、生産者が解放斗争と同時に特權化をくりかえしながら、しだいに産業資本家に轉化していく過程も、大塚史學では、農村の純粹培養的産業資本のかげにかくれてしまった。フランスにおいて絶対主義が封建的反動を一おう阻止したということは、高橋教授の見解と對比させうるであらうし、リエージュの英雄的抗戦が、むしろ職人ギルドの特權的封鎖性ようごのためであつたとすれば、羽仁五郎氏の「市民解放」史觀のなかにどのように位置づけられるであらうか。わたくしはこれらの、およびその他おおくの點について、ドップの本書からすくなからぬおしえをうけたことを感謝して、不十分な書評をおえたいとおもう。

(一九五〇・二・一七)